

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第39集

大西貝塚(Ⅲ)

1997年10月

豊橋市教育委員会
豊橋遺跡調査会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第39集

お お に し か い づ か
大 西 貝 塚 (Ⅲ)

1997年10月

豊橋市教育委員会
豊橋遺跡調査会

例 言

1. 本書は、豊橋市牟呂町字大西124番地他の公園築造工事に伴い実施された埋蔵文化財調査の報告書である。調査期間は、試掘・立会い調査が平成8年2月1日～2月17日で、本調査が平成9年7月28日～8月4日であり、今回は第4次調査に相当する。
2. 調査は、試掘・立会い調査は豊橋市教育委員会が行った。本調査は豊橋市役所公園緑地課が豊橋遺跡調査会に委託して行い、豊橋市教育委員会が調査の指導にあたり、岩瀬彰利（文化振興課文化財係）が担当した。
3. 発掘調査に際しては、事業者である豊橋市より調査費用等の援助を受けた。発掘作業、整理作業については、地元の方々のご協力を得ることができた。報告書作成にあたり、遺物・遺構等の実測・拓本・トレース等については、鈴木泰子、副島さや子、山本絢子他の援助を受けた。また、写真撮影は岩瀬が行った。
4. 本書の執筆に際して、自然遺物は樋泉岳二氏（日本学術振興会特別研究員）にご教示を頂いた。また遺物については伊藤正人（見晴台考古資料館）、川合剛（名古屋市博物館）、野口哲也（貝殻山貝塚資料館）、佐野元（瀬戸市埋蔵文化財センター）の各氏にご教示頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
5. 調査区の設定は任意であるが、第1～3次調査と同じ基準点・座標を用いている。なお、この座標は建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅱ系に準拠したものである。本書に使用した方位はこの座標に沿うものである。
6. 本書の執筆・編集は岩瀬彰利（豊橋市教育委員会）が行った。
7. 遺物・遺構のスケールについてはそれぞれに明示した。なお、写真の縮尺は任意である。
8. 本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管している。
9. 貝塚・貝層の面積・体積は下記文献の平均厚さ法を用いて算出している。

鈴木公雄 1981 「第12章貝塚体積の求積」『伊皿子貝塚遺跡』港区伊皿子貝塚調査委員会他

目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地 1
- 2. 歴史的環境 3

第2章 調査の経過

- 1. 調査に至る経過 5
- 2. 調査の方法 7

第3章 平成6年度試掘・立会い調査

- 1. 試掘調査 8
- 2. 立会い調査 10
- 3. 出土遺物 11

第4章 平成9年度本調査

- 1. 貝塚の規模と堆積層序 13
- 2. 遺構 17
- 3. 遺物 19
- 4. 自然遺物 22

第5章 まとめ 25

- 報告書抄録 27

挿 図 目 次

第1図	豊橋市周辺地形分類図 (1/200,000)	1
第2図	調査区周辺旧地表復元図 (1/400)	2
第3図	大西貝塚周辺主要遺跡分布図 (1/15,000)	4
第4図	大西貝塚調査区位置図 (1/1,000)	5
第5図	大西貝塚グリッド設定図 (1/500)	6
第6図	大西貝塚試掘グリッド配置図・平面図・断面図 (1/120・1/60)	9
第7図	試掘・立会い調査出土土器実測図 (1/3)	11
第8図	大西貝塚推定範囲図 (1/2,500)	14
第9図	調査区全体図・断面図 (1/50)	15
第10図	1層 (黒色砂質土層) 分布範囲図 (1/50)	16
第11図	2層 (灰褐色混土層) 分布範囲図 (1/50)	16
第12図	SD-1貝層データ	19
第13図	遺物実測図 (1/3)	20

表 目 次

第1表	試掘・立会い調査出土土器観察表	12
第2表	遺物観察表	21
第3表	ブロック・サンプル一覧表	22
第4表	貝層サンプル内容物組成表	22
第5表	動物遺体種名一覧表 (微小貝を除く)	23
第6表	貝種組成表	23
第7表	微小貝種名一覧表	24
第8表	微小貝種組成表	24
第9表	魚骨数量表	24
第10表	獣骨数量表	24

写真図版目次

図版 1-1	平成7年度試掘・G-1 全景 (南から)	2	平成7年度試掘・G-2 全景 (南から)
3	平成7年度試掘・G-3 全景 (南から)	4	平成7年度試掘・G-4 全景 (南から)
5	平成7年度試掘・G-5 全景 (南から)	6	平成7年度試掘・G-6 全景 (南から)
2-1	本調査区全景 (東から)	2	本調査区内貝層露出状況 (東から)
3-1	1層分布状況 (東から)	2	2層分布状況 (東から)
4-1	本調査区東壁 (西から)	2	本調査区西壁 (東から)
3	本調査区北壁 (南から)	4	本調査区南壁 (北から)
5-1	SD-1 全景 (西から)	2	調査風景
6-1	試掘・立会い調査出土遺物	2	本調査出土遺物
7-1	動物遺体-1・貝類	2	動物遺体-2・獣骨

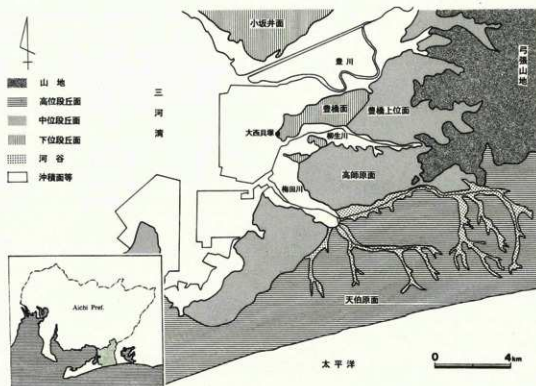
第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1・2図)

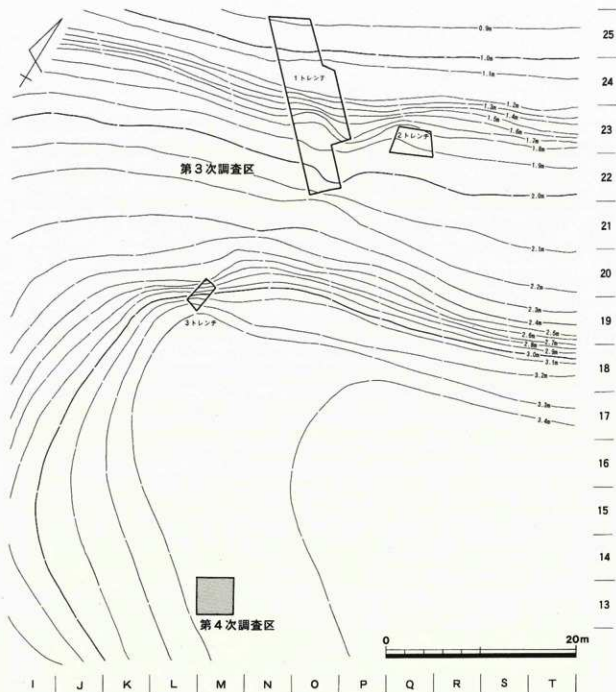
大西貝塚は、豊橋市牟呂町字大西・築根に所在する貝塚である(第1図)。豊橋市は東が弓張山地、南が太平洋、西が三河湾にそれぞれ面し、平野部は限られている。市域北側は一級河川である豊川が三河湾に向かって西流し、市域の大半は豊川と現在浜松市を貫流する天竜川の前身、古天竜川によって造られた河岸段丘上に位置している。河岸段丘は高位面(天伯原面・標高30~60m)、中位面(高師原面・豊橋上位面・標高15~30m)、低位面(豊橋面・標高4~10m)の3面に大きく分けることができる。

貝塚の所在する牟呂地区は豊川左岸の河岸段丘先端部にあり、前方に三河湾を臨み、北方には豊川が流れている。この台地は標高3~5mを測り、段丘西には現在では水田が広がっている。この地区は、海苔や貝加工などの沿岸漁業が現在でも盛んな地域である。また貝塚の多い地区であり、段丘西の砂堆を中心に段丘斜面、段丘上に貝塚が見られる。これら貝塚のうち、大西貝塚は段丘の最先端、三河湾に最も近い所に位置している。第2図は第3次調査及び今回の調査区を中心とした旧地表を復元した測量図である。これで見ると大西貝塚は標高約1.2~3mの段丘斜面から砂堆上に形成されていることがわかる。貝塚は、晩期中葉に段丘先端部から形成され、時期が新しくなるに従い段丘沿いに南下して作られていることが過去の調査で予想されている。

この貝塚のある段丘縁部は、崖状ではなく比較的ゆるやかな斜面であった。貝塚の造られた縄文時代後期末~晩期の汀線は台地付近にあったものと思われ、前方に広がる干潟で採集した貝を台地縁部



第1図 豊橋市周辺地形分類図 (1/200,000)



第2図 調査区周辺旧地表復元図 (1/400)

まで運んで貝処理をしていたものと思われる。この斜面地から砂堆にかけてはいわゆるクロボクが見られ、その分布範囲は長さ約200m、幅約60mと貝層の分布よりやや大きい。周辺の貝塚は全てクロボク上に形成されているが、このクロボクは貝塚部分以外は見つかっていない。このクロボクはイネ科草本が繁殖し、その後人間の生活に伴う腐植の混入や野焼きによって形成されたと考えられている。

以上のことから、大西貝塚は標高1.2m～3mの段丘縁部～砂堆のクロボク上に形成され、形成当初は汀線がすぐ近くであったものと思われる。やがて晩期になって海岸線が後退しても貝塚の形成される場所は基本的には変わらなかった。大西貝塚は旧汀線近くの浜辺において、生業活動の結果形成された貝塚といえよう。

2. 歴史的環境 (第3図)

大西貝塚の周辺部は、縄文時代から各時代の遺跡が多く残された遺跡の密集地である。ここでは、周辺の貝塚について述べる(第3図)。縄文時代の貝塚は、大西貝塚(16)をはじめ、坂津寺貝塚(1)、水神貝塚(第1貝塚-4)、水神貝塚(第2貝塚-5)、市杵嶋神社貝塚(23)、王塚貝塚(29)、王ヶ崎貝塚(38)、小浜貝塚(41)等が確認されている。このうち王ヶ崎・小浜貝塚は大西貝塚等の段丘と柳生川を挟んで対面する低位段丘に位置している。これらの貝塚は晩期を中心としており、このうち大西貝塚、水神貝塚(第2貝塚)、市杵嶋神社貝塚などは最近東京都中里貝塚の調査で注目された“ハマ貝塚”の典型例である。

坂津寺貝塚は昭和45年に発掘調査が行われている。貝塚はハマグリが主体で縄文時代中期中葉～後期初頭及び晩期の土器が出土している。現在までに牟呂地区で確認されている最古の貝塚である。

水神貝塚(第1貝塚)は沖積地に立地し、昭和59年の調査で縄文時代晩期前葉～中葉を中心とした遺跡であることが確認されている。貝層はハマグリを主体とし、約30mの厚さで残存していた。遺構では石組炉址、集石等が検出され、遺物には縄文時代晩期の土器をはじめ、打製石斧・磨製石斧・石鏃・搔器等の石器や弓筈状角製品・ヤス等の骨角器が出土している。

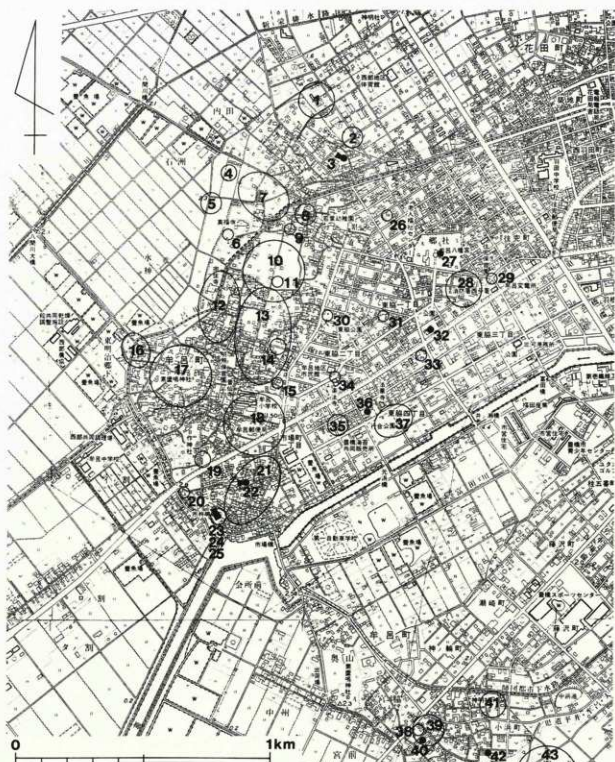
水神貝塚(第2貝塚)は砂堤上に位置し、平成3・4年に調査が行われている。貝塚は規模約50×20mで平面形は隅丸長方形をなしていた。貝層はハマグリが99%を占める純貝層で、厚さ約1.5mであった。遺構は集石、土壇、地床炉址等が検出され、地床炉址は約400箇所を数えた。遺物には晩期後葉の土器をはじめ、磨製石斧・石鏃や貝輪、貝穿孔品等が出土している。このうち、奄美大島以南でしか採れないイモガイ製の貝輪が出土しており、縦型としては分布の東限にあたる。また五貫森式期の地床炉内より、イネ科イネのプラントオパールが検出され注目される。

市杵嶋神社貝塚は前方後方墳の墳丘中に残存している貝塚で、昭和60年に発掘調査が行われ報告書が刊行されている。調査区内の貝層は縄文時代晩期末葉に形成されていた。貝塚は標高3mの小丘を中心に形成され、その規模は長径約60m程で、大半は古墳の後方部中に良好な状態で残っていると推測される。貝の種類は15種を数え、8割強がハマグリである。出土遺物には縄文時代後期中葉・末葉、晩期前葉・後葉の土器の他、条痕文土器、弥生土器や剥片・磨製石斧・石棒等が出土している。

王塚貝塚は未調査のまま滅失しているが、晩期の貝塚であると伝えられている。隣接する見丁塚遺跡の昭和62年調査時に、晩期の五角形鏃の部類に属すると思われる石鏃と黒曜石の剥片が各1点出土しており、王塚貝塚に伴うものであろう。

王ヶ崎貝塚は晩期の貝塚である。発掘調査は行われていないが、隣接する磯辺王塚古墳の平成3年発掘調査の際、石室の裏込め土中より条痕文土器と磨製石斧が出土している。

小浜貝塚は4箇所の貝塚からなる地点貝塚であったといわれ、発掘調査が昭和22・25・35・59年に行われている。今までの調査から、貝塚はハマグリ主体でアカニシ、アサリ、ハイガイ、オキシジミ等の26種で構成されていたことがわかっている。遺物は縄文時代前期～晩期の土器の他に石鏃・石匙・磨製石斧等の石器、貝輪等の貝製品や屈葬人骨が出土している。



- | | | | | | |
|------------|----------|------------|-------------|-----------|----------|
| 1 坂津寺貝塚 | 9 市道北遺跡 | 17 大西遺跡 | 25 市杵嶋神社古基 | 33 高良社遺跡 | 41 小浜貝塚 |
| 2 境松遺跡 | 10 市道遺跡 | 18 中村遺跡 | 26 八王子神社遺跡 | 34 薬法寺北遺跡 | 42 万福寺古墳 |
| 3 三ツ山古墳 | 11 市道1号窯 | 19 作神遺跡 | 27 牟呂八幡神社古墳 | 35 行合遺跡 | 43 王ヶ崎遺跡 |
| 4 水神貝塚(第1) | 12 大海津遺跡 | 20 さんまい貝塚 | 28 見丁塚遺跡 | 36 権現神社古墳 | |
| 5 水神貝塚(第2) | 13 公文遺跡 | 21 市場遺跡 | 29 王塚貝塚 | 37 東路遺跡 | |
| 6 水神古窯 | 14 牟呂城址 | 22 牟呂王塚古墳 | 30 市道西遺跡 | 38 王ヶ崎貝塚 | |
| 7 若宮遺跡 | 15 公文南遺跡 | 23 市杵嶋神社貝塚 | 31 林遺跡 | 39 王郷遺跡 | |
| 8 外神遺跡 | 16 大西貝塚 | 24 市杵嶋神社古墳 | 32 東脇古墳 | 40 磯辺王塚古墳 | |

第3図 大西貝塚周辺主要遺跡分布図 (1/15,000)

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過 (第4図)

大西貝塚の所在する牟呂地区は古くから漁業で栄えた市場港を中心に発展し、住宅の密集地であった。このため、防災及び都市整備の面から土地区画整理事業の必要性が指摘され、昭和55年度から牟呂土地区画整理事業が開始されている。この事業に先だって牟呂地区遺跡調査会が結成され、道路造成や宅地造成に伴う発掘調査を行っている。これら調査のうち、大西貝塚は3回調査が行われている。第1次調査は1トレンチ(道路予定地と宅地)と2トレンチ(道路予定地)の2箇所(合計630㎡)が、第2次調査は保留地分譲地(250㎡)を対象に行われた。第3次調査は豊橋市役所道路建設課が貝塚内の道路を拡張するのに伴い、豊橋遺跡調査会が拡張部分(250㎡)を調査している。

今回報告する第4次調査は、大西公園諸施設築造工事に伴って行われたものである。調査に至る経過は次の通りであった。

平成6年9月、豊橋市教育委員会文化振興課から市役所各課に対し、平成7年度の開発事業計画予定の照会を行った。この際、市役所公園緑地課から大西貝塚範囲内の公園予定地を整備する回答を得た。このため、公園緑地課と協議し、公園は遊具、休憩場及びトイレ等の諸施設を造る予定であることを把握した。平成7年度になり事業及び設計が決定し、これら工事は平成7年度と平成9年度の2箇年で行うこととなった。工程がほぼ確定したため、公園緑地課と協議を行った。現地には30m程の盛土

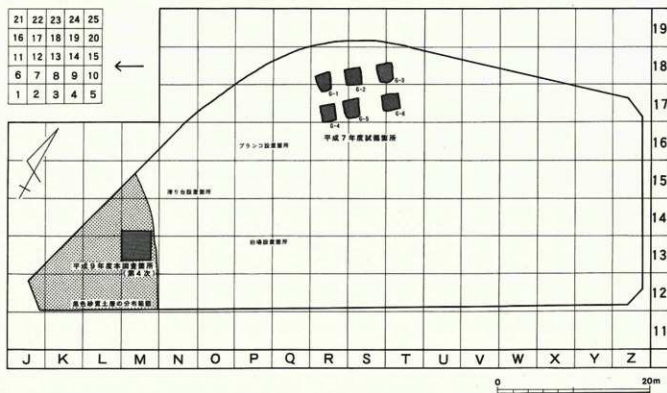


第4図 大西貝塚調査区位置図 (1/1,000)

があるため、平成7年度に行うフェンス等の小規模工事は立会い調査に、平成9年度に行うトイレ工事は掘削部分の面積が広いため発掘調査を行う方向で決定した。

工事に先だって、平成7年12月に文化財保護法第57条の3の通知が公園緑地課よりあり、平成8年1月より工事を開始した。工事は公園フェンスから始まり、他の施設へと移っていった。フェンス工事の立会い調査では、基礎部分が地山まで達し、縄文土器片などが出土した。断面を観察すると、縄文時代の明確な貝層には当たらなかったが、クロボク層が公園敷地範囲の西端から4.5m程の長さで東まで延び、その先には見られなかった。縄文土器片はこのクロボク層を中心に出土し、約50片が採集できた。縄文時代の遺物は、このクロボク層あたりまでで採集できたが、これより東からは採集できなかった。ところが、工事が進捗するに従い、休憩場の屋根柱基礎をかなり深く掘ることが分かった。このため、基礎が掘られる部分の6箇所に対し、基礎掘り方と同じ範囲の2×2m大のグリッドを6箇所設定し、24㎡を試掘調査した。試掘調査は平成8年2月15・16日の2日間で行った。調査では、縄文時代の貝層や遺構は検出されなかったが、縄文土器片は僅かながら出土している。一方、中世の溝や掘立柱建物が検出され、遺構は中近世主体であることがわかった。

平成9年度になり、トイレ部分について公園緑地課と豊橋遺跡調査会が委託契約を結び、豊橋市教育委員会の指導のもと、豊橋遺跡調査会が調査を行った（第4次調査）。調査は平成9年7月28日～8月4日にかけて行った。調査区の位置は第4図の通りである。本調査は第1次調査の基準点を用い、5m×5mのグリッドを基本にして調査区を区割りし、表土等の遺物は小グリッド単位で取り上げて行った。調査区周辺は、区画整理時の廃土、資材置き場に使われたため、土地の造作が著しく、旧地表面は削平されていた。また、調査区内の大半は現代のゴミ穴によって破壊されていたが、それ以外は旧状を留めていた。造成土下には近世の灰褐色粘土貝層があり、その下に黒色砂質土層（クロボク）が堆積していた。地山（黄褐色粘土層）は黒色砂質土層の下から検出された。



第5図 大西貝塚グリッド設定図 (1/500)

2. 調査の方法 (第5図)

第4次調査区はトイレ設置部分に設定し、ここは貝塚の北部西端に相当する。発掘調査を行うに際し、区画整理の道路方向にあわせて設定した第1次調査時の区割りを拡大し、5m×5mのグリッドを大グリッドとし、調査区内の区割りを設定(第5図参照)している。基準点も第1次調査使用のものをそのまま使用した。大グリッドは呼称を北西-南東軸をアラビア数字(南東から1、2、……)、北東-南西軸をアルファベット(南西よりA、B、……)で表し、地区名を「A-1」、「B-1」のように表示した。今回も第3次調査同様、大グリッドを25分割して、1m×1mの小グリッドを設定し、大グリッド南西端を起点に第5図の様にアラビア数字で表記した。従って、小グリッドを表記するときは「A-1-1」ようになる。発掘調査の地区名を当報告書においても使用するので、例えばD-3-1区はD列と3列の交差する位置の大グリッド中、小グリッド1の位置であることを示している。

発掘調査の基本的な手順は次のように行った。当初は手掘りで全て行う予定であったが、造成土が予想以上に厚くしかも硬く締まっていたため、途中から重機を用いて表土を剥いている。

1. 調査区を設定し、調査の地区割りを行う。
2. 表土から貝層まで手掘りでサブレンチを入れ、重機によって表土を剥ぐ。
3. 貝層を露出させ、記録写真を撮る。
4. 貝塚に掘り込まれた後世の攪乱層を確認・除去し、貝塚残存部のみの状態にして範囲を記録する。
5. 貝層は調査区の四方壁面にサブレンチを入れながら掘り下げ、一部ブロック・サンプリングを行う。
6. 貝層中より出土した遺構や遺物、石等は原則的に全ての出土位置、レベル高を記録して番号を付け、必要なものは写真を撮影して取り上げる。
7. 貝層下の黒色砂質土層を露出させ、写真を撮る。
8. 黒色砂質土層を掘り下げ、石等は出土位置を記録する。
9. 黒色砂質土層を除去し、地山を露出させる。
10. 地山に掘り込まれた遺構を完掘する。
11. 遺構平面図を作成する。また調査区壁面より断面図を作成する。
12. 全体写真及び断面写真を撮影する。
13. 溝内に堆積している貝層は、調査区壁面よりブロック・サンプリングを行う。
14. 重機による埋め戻し。

このような工程で第4次調査を行った。

第3章 平成6年度試掘・立会い調査

1. 試掘調査 (第6図)

試掘調査は、休憩用東屋基礎部分に対して行った。各グリッドは原則として2×2mの規模で、6箇所を設定した。設定したグリッドの配置は第6図の通りである。この章ではグリッドごとに層位・遺構の説明を行い、出土遺物の詳細については立会い調査のもの一括して第3章3で説明する。本文中の計測値は遺構検出面での数値である。なお、本文中の丸数字はグリッド断面図の土層番号に対応する。

G-1 (第6図)

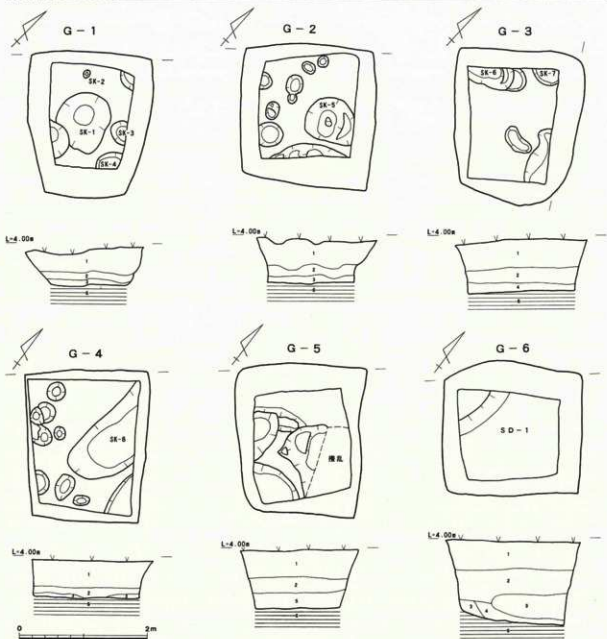
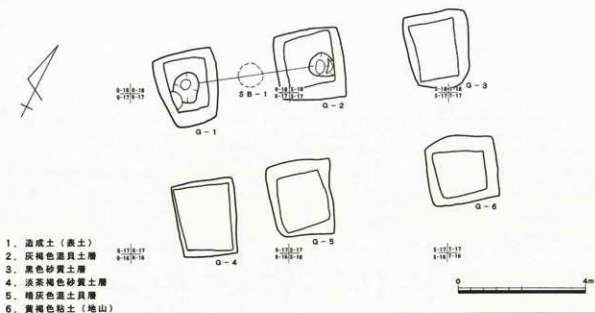
地山面の標高は約3.32mで、厚さ約40cmの①造成土(表土)の下にはハマグリ混ざる②灰褐色混貝土層が約10cm堆積していた。②層の下には厚さ10cm程の③黒色砂質土層が見られる。この層はいわゆるクロボク層であるが、貝塚下のクロボク層と比較するとやや粘性を帯びている。この層の下に⑥黄褐色粘土(地山)があり、遺構は地山面で検出している。遺構には土壇6基が確認されている。このうちSK-1は径84cm、深さは74cmを測る円形の柱穴で、遺物は出土していない。SK-2は径10cmの円形で、深さ4cmの小型のもので、土師器(Ⅲ)破片が2点出土している。SK-3は長さ33cm以上の土壇で、近世の土師器(Ⅲ)が1点出ている。SK-4は深さ30cmの土壇で、陶器(碗)の破片が出土している。この他の土壇からは遺物は出土しておらず、表土等から縄文土器片1点、土師器(Ⅲ)1点が出土しているに過ぎない。

G-2 (第6図)

地山面の標高は約3.26mで、土層層序はG-1と同じである。遺構は土壇が9基検出されている。SK-5は長さ85cm以上の楕円形の柱穴で深さは54cmを測り、床面に10cm程の平らな石を置く。SK-1と同じ掘立柱建物の柱穴と考えられ、柱穴間は4.32mを測り、間にもう1基の柱穴があることが推測される。SK-1・5とも遺物は出土していないが、G-1・2より近世の陶器や土師器が出土していることから、建物は近世のものと思われる。他の土壇は小型のものが大半で、遺物は出土していない。遺物は表土等から縄文土器片1点、土師器片3点が出土しているに過ぎない。

G-3 (第6図)

地山面の標高は約3.12mで、土層層序は②層まではG-1・2と同じで、その下には厚さ15cmの④淡茶褐色砂質土層が見られる点が異なる。この下は⑥黄褐色粘土(地山)である。遺構では5基の土壇が確認されている。SK-6は長さ66cm以上の平面楕円形と思われる深さ43cmの土壇で、中から土師器(Ⅲ)の破片が3点出土している。SK-7は深さ3cm程と浅い土壇で、近世の磁器及び土師破片が各1点ずつ出土している。これ以外の土壇から遺物は出土していない。この他の出土遺物には、



第6図 大西貝塚試掘グリッド配置図・平面図・断面図 (1/120・1/60)

表土等から土師器（Ⅲ）4点、陶器（播鉢等）2点の小片が出土している。

G-4（第6図）

地山面の標高は約33.4mで、土層層序はG-1・2と同じである。遺構では、土壌が10基検出されている。SK-8は長さ126cm以上、幅84cm、深さ45cmの土壌で、埋土が黒色砂質土であり、他の土壌埋土とは異なっていた。土壌内からは、条痕文土器片2点、古墳時代の土師器片2点が出土し、帰属時期は古墳時代頃のものと思われる。この他の土壌からは遺物は出土していない。表土等から出土した遺物には、縄文土器1点、中世陶器1点、磁器1点、土師器（内耳鍋）1点の破片がある。

G-5（第6図）

地山面の標高は約32.7m、土層層序は②層の下までは他のグリッドと同じで、その下にハマグリ主体の⑤暗灰色混土貝層が堆積している。この層の下に⑥黄褐色粘土（地山）が見られた。グリッド内は、攪乱によって一部が破壊されていた。検出された遺構には、溝になる可能性のある落ち込みが1箇所と土壌3基が重複して見つっている。遺構から出土した遺物は無く、表土等から縄文土器1点、古墳時代土師器3点、土師器（Ⅲ）12点、陶器2点、磁器1点の小片が出土しているに過ぎない。

G-6（第6図）

地山面の標高は約2.89mを測り、土層層序は②層までは他と同じで、その下には④淡茶褐色砂質土層（厚さ最大約15cm）が堆積していた。この層を掘り込んでSD-1が造られ、溝埋土のハマグリ主体の⑤暗灰色混土貝層が見られた。④層下には⑥黄褐色粘土（地山）があったが、その間にグリッド北西隅に僅かであるが③黒色砂質土層が見られ、クロボクがここまで部分的に及んでいたことが考えられる。遺構ではSD-1がグリッドの殆どを占め、他は確認されていない。SD-1は幅1.5m以上、深さが12cm程の広く浅い溝である。溝内からは縄文土器6点、須恵器2点、古墳時代の土師器1点の小破片が出ている。表土等からは遺物は出土していない。

2. 立会い調査

立会い調査は、公園フェンス等の諸施設築造の際に行った。ここでは、立会い調査中の状況の概要を説明する。フェンスは公園外周を取り巻くように設置され、工事は基礎部分を幅50m、深さ地表下50cm位を掘削するものであった。この立会い調査では、明確な遺構は確認されなかったが、貝塚下から延びる黒色砂質土層（クロボク）の端を確認できた。黒色砂質土層は公園西端にのみ見られ、地区で言うところのM-12～M-15にかけての範囲である（第5図参照）。一方、試掘調査で確認されたR-17付近の黒色砂質土層は掘削深度より深くにあるため、フェンス工事の際には確認されていない。しかし、北側に位置する大西橋改修工事の際に、台地北端に黒色砂質土層が認められており、この層は台地端部を取り巻いているものと思われる。ただ、これらは台地西端のものではなく、台地北側のものが及んでいたか、点在するものの可能性も考えられる。この他、ブランコ、滑り台、砂場等の工事立

会いには、一部地山まで達するものがあったが、遺構は確認できなかった。立会い調査で採集できた遺物は、縄文土器2点、古墳時代の土師器1点、陶器3点の計6点と少ない。これらの遺物のうち、縄文時代のものは黒色砂質土の分布図範囲から出土したものである。

3. 出土遺物 (第7図・第1表)

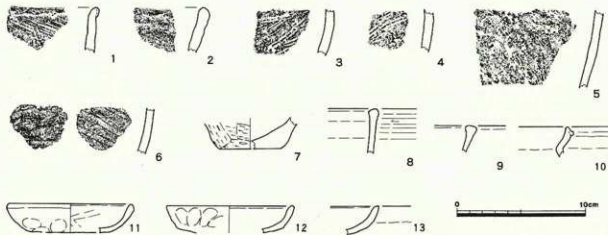
立会い・試掘調査での遺物は各グリッドから出土しているが、土器の細片のみで総数は65点と少ない。内訳は縄文土器14点、古墳時代土師器6点、須恵器2点、中世陶器1点、陶器8点、磁器4点、土師器29点、土錘1点である。遺物に関しては、出土した遺物の点数が少ないため試掘調査、立会い調査をまとめ、図示できるものを種類別に説明する。従って、グリッド・遺構・層位等に分けての説明は行わない。具体的には、縄文土器、陶器、土師器の各種類毎にまとめて述べる。出土したグリッド、層位や遺物の調整等は本文中で殆ど触れないが、章末に遺物観察表(第1表)を添えているので、詳細はそれを参照して頂きたい。

縄文土器 (第7図1~7)

1・2は粗製深鉢の口縁部破片である。1は口縁端部を内側からナデで丸めている。調整は外面具条痕、内面ナデである。2は口縁端部は丸く、調整は外面削痕、内面板ナデである。3~6は体部破片である。調整は、3~5が外面削痕、内面ナデ、6が内外面ミガキである。7は底部であり、調整は外面削痕、内面ナデ、底はナデである。これらの縄文土器は晩期後葉の突帯文土器に伴うものであるが、1は晩期末葉の椀王式の可能性がある。

陶器 (第7図8・9)

8・9は鉢の口縁部破片と思われ、口縁端部は肥厚されている。調整は内外面回転ナデで、軸が掛かる。これらは、近世のものと思われる。



第7図 試掘・立会い調査出土土器実測図 (1/3)

土師器

10は内耳鍋の口縁部破片で、いわゆるくの字型鍋である。口縁端部はナデ窄められ、調整は内外面ナデである。11~13は小皿である。手づくね整形され、器型は比較的深い。11・12の外面には指頭圧痕が認められる。このうち11は内面に煤が見られ、灯明皿として使用されていたようである。これらは近世のものである。

第1表 試掘・立会い調査出土土器観察表

遺物NO.	グリッド	層位・遺構	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
7-1	G-6	SD-1	J・深鉢					密	良好	暗灰褐色	内面ナデ、外面具条痕	
2	G-6	SD-1	J・深鉢					密	良好	明黄褐色	内面ナデ、外面散ナデ	
3	G-4	SK-8	J・深鉢?					密	良好	淡黄褐色	内面ナデ、外面削痕	
4	G-4	SK-8	J・深鉢?					密	良好	淡黄褐色	内面ナデ、外面削痕	
5	立会い		J・深鉢?					密	良好	淡茶褐色	内面散ナデ、外面削痕	
6	立会い		J・深鉢?					密	良好	黒褐色	内外面ミガキ	
7	G-2	表土	J・深鉢?		(2.5)	4.8		密	良好	茶褐色	内面ナデ、外面削痕、底ナデ	
8	G-1	SK-4	T・鉢					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、軸	
9	G-5	表土	T・鉢					密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ、軸	
10	G-4	表土	H・内耳鍋					密	良好	淡白褐色	内外面ナデ	
11	G-1	SK-3	H・小皿	9.6	2.3			密	良好	淡茶褐色	内面散け、外面け、指押さえ	
12	G-5	表土	H・小皿	10.0	2.1			密	良好	淡白褐色	内面け、外面け、指押さえ	
13	G-5	表土	H・小皿					密	良好	淡白褐色	内外面ナデ	

※法量の単位はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

J-縄文土器、H-土師器、T-陶器

第4章 平成9年度本調査

1. 貝塚の規模と堆積層序 (第8・9図)

A. 貝塚の規模 (第8図)

大西貝塚のある牟呂地区は、現在でも採貝活動の盛んな地域である。三河湾全体でみると水揚げ量は全国一位であり、この地域は其中でも主要な地位を占めている。このため、近年まで剥き身の際に不要となった貝殻が住宅周辺に投棄されるというように、現代においても貝塚を作っていた。幸い、江戸時代後期以降はアサリが投棄されたため、それ以前のハマグリ主体の貝層と区別は容易につく。だが、縄文から江戸時代まではハマグリ主体で貝種組成にあまり変化がなく、このため区別が困難な状況にある。特に大西貝塚の縄文時代貝層は、中～近世の貝殻に覆われ、表面観察のみではその範囲確認は困難であった。しかし、三次に渡る調査や試掘・立会い調査結果から、縄文時代後期後葉の伊川津式期より貝塚が形成されていることが確認され、縄文時代の貝塚は長さ185m、幅40mで面積は5,762㎡、体積は5,877㎡で、厚さ最大2.5mを測り、予想外に大規模なものであったと判明している。また、縄文時代以外の主要な貝層形成期は、古墳時代と江戸時代であり、各時代を通した貝塚全体の規模は長さ約235m、幅約105m、厚さは最大約3m、面積約19,000㎡と推定することができた。ただ、体積については貝塚南部の貝層の厚さが全く不明なため推定できない。この貝塚の規模は、西日本の貝塚のなかでは最大級の規模であるといえよう。

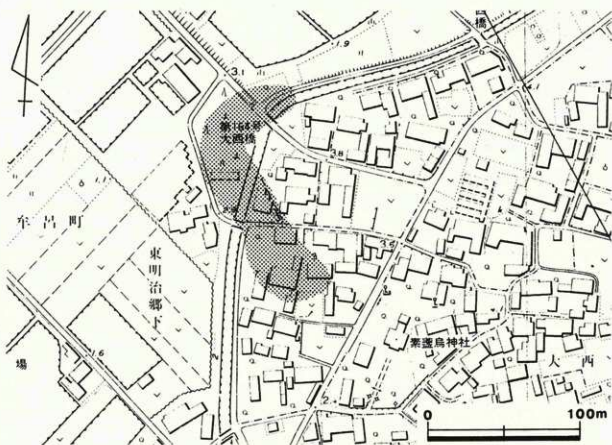
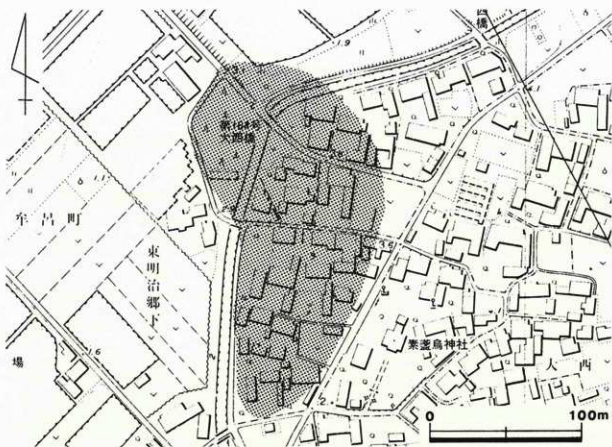
今回の調査区は、縄文時代の貝層分布範囲からは離れるが、近世の貝層分布範囲内に位置するものと推定された。調査区の貝塚全体における位置は北部中央付近であるが、貝層の主体は西側によっているため、貝層の厚さは薄く10cm程であった。

B. 堆積層序

今回の調査区は縄文時代貝塚の中心部から離れているため、縄文時代貝層は検出されていない。しかし、貝塚基盤に相当する黒色砂質土層(クロボク)は調査区まで及んでいた。このクロボク上には近世のものと思われる灰褐色の混土貝層が堆積していた。貝層上は造成土が堆積しており、旧表土等は確認できなかった。調査区周辺は区画整理工事の際、廃土や資材置き場に利用され、土砂の移動が著しかった。このため廃土処理や公園造成の際に旧表土及び貝層の上部は削平されたことが考えられる。ここでは、確認された各層の概要を説明する(第9図)。

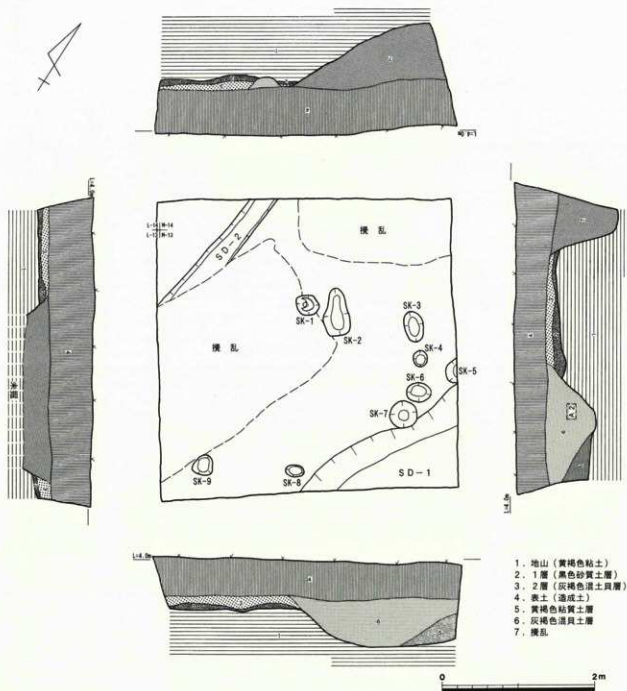
地山 [黄褐色粘土層] (第9図1)

ベースになる層であり、黄褐色の粘土層である。低位段丘面はこの層が地山となるが、段丘西側の縄文貝塚中心部では段丘は海に浸食され、このためこの粘土層は存在しない。代わりに前方の砂浜海岸から飛来した風成砂層が堆積し、これが地山となっている。この粘土層上面の標高は約3.3mであり、ほぼ水平に堆積している。遺構は、9基の土壌が確認された。



第8圖 大西貝塚推定範圍圖 (1/2,500)

上、貝塚範圍
下、縄文時代貝塚範圍

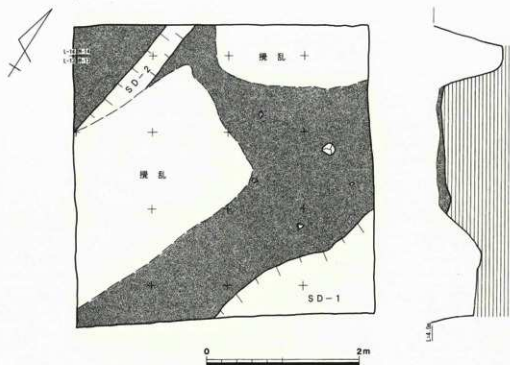


第9図 調査区全体図・断面図 (1/50)

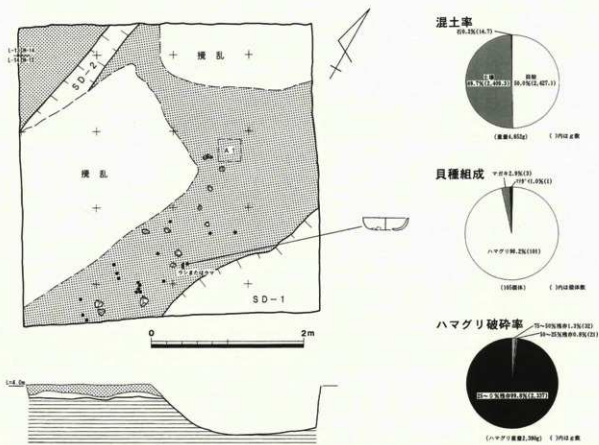
1層【黒色砂質土層】(第9図2、第10図)

いわゆる「クロボク」層で、第1～3次調査で確認されたものと同じ層である。この層は貝塚を中心とした部分のみ検出されており、過去の調査によって、その生成は植物等が人為的に焼かれたり腐植の混入によって形成され、形成時期は後期後葉であることが分かっている。この層の厚さは最大16cm、平均6cmの厚さで地山上に堆積し、調査区内全域に本来は広がっていた。攪乱部を除く検出された面積は7.1㎡、体積は0.43㎡であった。

遺構は確認されていないが、石は4cm～20cm大のものが散在し、5個出土している。遺物は出土していない。



第10図 1層（黒色砂質土層）分布範囲図（1/50）



第11図 2層（灰褐色混土貝層）分布範囲図（1/50）

2層 [灰褐色混土貝層] (第9図3、第11図)

1層上に堆積した貝層であり、重量比で砂が49.7%混ざる混土貝層である。貝層は上部を前述したように削平されている可能性があり、また大半を現代の攪乱によって壊されていたが、残存部の保存状態は良好であった。貝層は、残存面積7.1㎡、厚さ最大16cm、平均10cm、体積0.71㎡で、標高約3.4mの1層上に水平堆積し、上面は平坦になっている。貝種組成は、ハマグリが96.2%を占める程の一種集中の貝層で、ハマグリは破砕率は貝殻が25~0%大に割れた細片が97.8%と破砕が著しく、完形のものも1個体もなかった。このため、ハマグリは殻長分布は破砕が著しく計測できなかった。

遺構は検出されなかったが貝層中には6cm~15cm大の石が散在し、全体で13個出土している。遺物では縄文土器及び土師器が出土し、土器は総数18点が散在している。また哺乳類骨片がM-13-13区より出土している。土器の大半は縄文土器であるが近世の土師器・皿が含まれることから、近世になって貝殻が投棄され、1層上に散在していた縄文土器が混在したことが想定される。このことより、2層の形成時期は近世(19世紀以前)のものと思われる。また、2層堆積後にSD-1・2が掘り込まれている。

表土 [灰色砂質土層] (第9図4)

表土は暗褐色砂質土層等3層の堆積構造が確認されたが、全て最近の造成土であるため一括して扱った。厚さは50~60cmを測り、調査区を全城を均一状態で覆っている。現代の瓦礫と共に縄文土器等の遺物が若干出土している。

2. 遺構 (第9図)

今回の調査では、遺構は地山より土壌・溝が検出されているに過ぎず、炉址は無かった。ここでは、遺構ごとにまとめて説明する。なお測定値は遺構検出面での数値である。

A. 土壌

土壌は9基が残存しており、全て小規模なもので地山面で検出されている。1層上面では掘り込みは確認できなかったことから、これらの土壌の帰属時期はクロボク形成以前、つまり縄文時代後期後葉の可能性が考えられるものである。今回は、これら土壌のうち主要なものを説明する。なお、貝層中からは土壌は確認されていない。

SK-1 (第9図)

SK-1は、M-13-17・18・22・23区の地山に掘り込まれた土壌で、西側上部を攪乱で削平されている。平面形は楕円形であり、規模は長径32cm、短径27cm、深さは21cmを測る。土壌は深さ約10cmの所で一度平坦になり、更に径7cm程が掘り込まれている。埋土は黒色砂質土層で、遺物は出土していない。

SK-2 (第9図)

SK-2は、M-13-18・23区の地山に掘り込まれた土壌である。平面形は長楕円形で、規模は長径62cm、短径35cm、深さは5cmを測る。埋土は黒色砂質土層で、遺物は出土していない。

SK-3 (第9図)

SK-3は、M-13-19区の地山に掘り込まれた土壌である。土壌は平面形は楕円形で、規模は長径28cm、深さは5cmを測る。埋土は黒色砂質土層で、遺物は出土していない。

SK-4 (第9図)

SK-4は、M-13-19区の地山に掘り込まれた土壌で、平面形は円形であり、規模は径20cm、深さは4cmを測る。埋土は黒色砂質土層で、遺物は出土していない。

SK-5 (第9図)

SK-5は、M-13-19区の地山に掘り込まれた土壌で、東部は調査区外にあり平面形は不明である。規模は検出された長さ30cm、深さは4cmを測る。埋土は黒色砂質土層で、遺物は出土していない。

SK-6 (第9図)

SK-6は、M-13-14区の地山に掘り込まれた土壌である。土壌は平面形は楕円形で、規模は長径32cm、深さは6cmを測る。埋土は黒色砂質土層で、遺物は出土していない。

SK-7 (第9図)

SK-7は、M-13-14区の地山に掘り込まれた土壌で、南側端部はSD-1で一部壊されている。平面形は円形であり、規模は径37cm、深さは16cmを測る。埋土は黒色砂質土層で、遺物は出土していない。

SK-8 (第9図)

SK-8は、M-13-7区の地山に掘り込まれた土壌である。平面形は楕円形で、規模は長径25cm、短径15cm、深さは5cmを測る。埋土は黒色砂質土層で、遺物は出土していない。

SK-9 (第9図)

SK-3は、M-13-6区の地山に掘り込まれた土壌である。土壌は平面形は不正円形で、規模は長径28cm、深さは10cmを測る。埋土は黒色砂質土層で、遺物は出土していない。

B. 溝

溝は2条検出されているが、いずれも一部のみである。両者とも2層から掘り込まれており、近世

のものである。

SD-1 (第9・12図)

SD-1はM-13-10区付近で検出された溝である。調査区内で確認された溝は片側部分のみのため幅は不明であるが北東-南西方向に伸び、検出された長さ約2m、深さは38cmである。溝底は比較的平坦で、溝の埋土は、淡黄褐色粘質土層が堆積後、灰褐色混貝土層が堆積している。この貝層は良好に残存していたためブロック・サンプリング(A2)を行っている。貝種組成は、ハマグリが59.3%、アサリ3.2%とハマグリ主体の貝層で、他はキサゴ23.1%、イボキサゴ5.0%等と腹足綱のものもまともに見られた。特にキサゴが多い点は、当時農業肥料として用いられ、商品として流通していたことが影響しているのだろう。ハマグリは殻が25~75%程度の細片が77.8%を占め、完存~75%のものは8.4%と破砕が著しい。溝に投棄されたものの割には破砕が進んでいることから、投棄後の土中埋没まで長い期間あり、人の往来等で破砕されたものと思われる。一方投棄されたハマグリは殻長は2.0~6.0cmの間に分布し、3.6~3.8cmが25%と最も多く、4.6~5.0cmのものも比較的多く見られた。

遺物は多く出土していないが、縄文土器、灰軸陶器、陶器、磁器、土師器、陶錘の細片が見られた。SD-1は層位と出土遺物から、江戸時代(19世紀代)に掘られたものと思われる。

SD-2 (第9図)

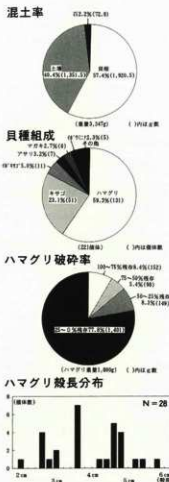
SD-2はM-13-21区付近で検出された溝である。調査区で確認された溝は北東方向に伸び、溝の規模は、最大幅35cm、長さ2.05mで深さは7cmぐらいの平坦なものである。溝の埋土は灰褐色混貝土層で遺物は出土していないが、2層を掘り込んでいることから近世以降のものと思われる。

3. 遺物 (第13図)

調査では、貝層内及び表土・攪乱部より遺物が出土している。遺物には、縄文土器をはじめ土師器、須恵器、灰軸陶器、近世陶器等の人工遺物の他に貝類、獣骨、魚骨等の自然遺物が見られた。自然遺物は次項で説明するので、ここでは人工遺物のみを扱う。

2層出土遺物 (第13図1~4)

1~3は縄文土器である。1は粗製深鉢の口縁部破片で、端部はやや面をもち、調整はナデである。輪痕が見られる。2・3は体部破片で、調整はナデ(2)と削痕(3)である。4は土師器・皿で

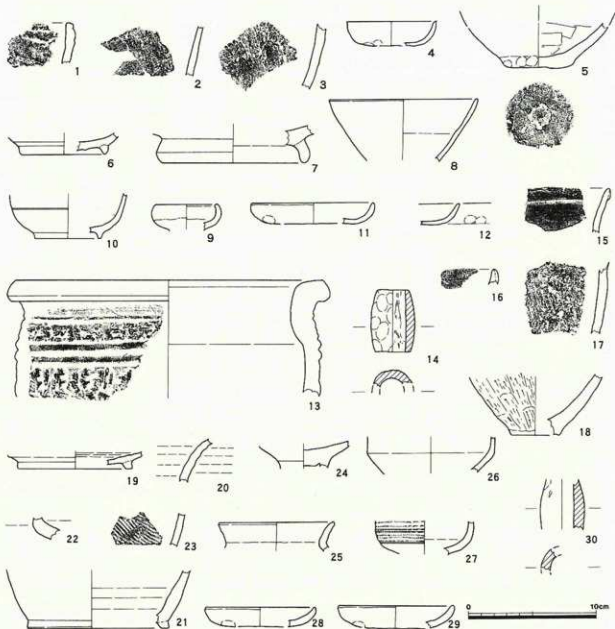


第12図 SD-1貝層データ

ある。手づくね整形され器形はやや深く、内面ナデ、外面未調整である。1～3は晩期後葉（1は中葉の稲荷山式の可能性あり）、4は近世のものである。

SD-1 出土遺物（第13図5～14）

5は縄文土器の底部である。僅かな外周があり、底面は径2cm、深さ1mm程を窪ませており、いわゆる窪み底である。6は灰釉陶器・碗の底部である。高台は三角高台で、底部は糸切りである。7は中世陶器・鉢の底部である。やや内湾する高台が付く。8～10は陶器である。8は碗の口縁部破片である。広東碗で、灰釉が施されている。9はひょうそくの口縁部破片で、鉄釉が施される。10は碗の底部で、肥前系のものである。11・12は土師器・小皿である。手づくね整形され、内面ナデ、外面未調整である。13は瓦製火鉢である。口縁部は折れ曲がり厚く、体部には様々な模様が付けられている。14は陶鍾である。径2.5cm、長さ4.9cmで、内径は2.0cmである。外面の釉は使用のため剥離し



第13図 遺物実測図 (1/3)

ている。これらの遺物のうち、5は縄文時代後期後葉の宮滝式～伊川津式期、6は10世紀代、7は中世であり、それ以外は19世紀代のものと思われる。

攪乱・表土出土土器（第13図15～30）

15～18は縄文土器である。15は小型の深鉢もしくは鉢のやや外反する口縁部破片で、端部は丸い。突帯は素文突帯が口縁端部外面に貼り付けられている。調整は内外面とも丁寧なミガキである。16は突帯部分の破片で、口縁端部に素文突帯が貼り付けられている。17は体部破片で、削痕調整がなされている。18は底部破片で、僅かに外周がある平底である。調整は外面削痕である。19～23は須恵器である。19は坏身の高台部破片で、断面箱形の高台が貼り付けられている。20は壺の外反する口縁部付近の破片である。21は壺の底部破片で、断面箱形の高台が貼り付けられている。22は甕の頸部破片である。23は甕の体部破片で、外面にタタキ目が見られる。24・25は土師器である。24は高坏の接合部破片で、坏部は大きく開くようである。25は小型壺で、口縁部は屈曲しやや広がり、端部は尖る。調整はナデである。26・27は陶器である。26は天目茶碗の屈曲する体部破片で、鉄釉が掛かっている。27は鍔茶碗の体部破片である。28・29は土師器・小皿である。手づくね整形され、内面ナデ、外面未調整である。30は土鍾の破片で、径3.5cm、内径1.8cm程と思われる。これらの遺物の帰属時期は、15～18は縄文時代晩期後葉、19は古代、20～23は古墳時代～古代、24・25は古墳時代、26～29は近世のものと思われる。

第2表 遺物観察表

遺物NO.	地区	層位	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
13-1	M-13-14	2層	J 深鉢					密	良好	灰褐色	内面ナデ、外面ナデ、輪横痕	
2	M-13-12	2層	J					密	良好	茶褐色	内面ナデ、外面ミガキ	
3	M-13-12	2層	J					密	良好	暗茶褐色	内面ナデ、外面削痕	
4	M-13-13	2層	H 皿					密	良好	明茶褐色	内面ナデ、外面未調整、指押さえ	
5	M-13	SD-1	J 深鉢		(3.5)	5.2		密	良好	茶褐色	内面板ナデ、外面ナデ、指押さえ	
6	M-13	SD-1	K 碗		(1.7)	6.6		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部半切り	
7	M-13	SD-1	P 碗		(2.9)	11.2		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
8	M-13	SD-1	T 碗	11.6	(4.8)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、輪	
9	M-13	SD-1	T ひょうそく	4.8	(1.8)			密	良好	茶褐色	内外面回転ナデ、輪	
10	M-13	SD-1	T 碗		(3.5)	5.2		密	良好	暗茶褐色	内外面回転ナデ、輪	
11	M-13	SD-1	H 小皿	11.4	1.6			密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面未調整、指押さえ	
12	M-13	SD-1	H 小皿					密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面未調整、指押さえ	
13	M-13	SD-1	B 火鉢	24.0	(9.1)			密	良好	暗黒灰色	内面ナデ、外面型どり	
14	M-13	SD-1	T 陶鍾	長さ4.9、径2.5、重量19.5				密	良好	淡灰色	外面板ナデ、指押さえ、輪	
15	M-13	表土	J 小型鉢?					密	良好	黒褐色	内外面ミガキ	
16	M-13	表土	J 深鉢?					密	良好	淡茶褐色	内外面ナデ	
17	M-13	表土	J					密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面削痕	
18	M-13	表土	J 深鉢?		(4.7)	3.8		密	良好	淡褐色	内面ナデ、炭化物付着、外面削痕	
19	M-13	表土	S 坏身		(1.4)	4.5		密	良好	淡青褐色	内外面回転ナデ	
20	M-13	表土	S 壺					密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、自然輪	
21	M-13	表土	S 壺		(4.6)	12.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
22	M-13	表土	S 甕					密	良好	淡灰色	内外面ナデ	
23	M-13	表土	S 甕					密	良好	淡灰色	内面ナデ、外面タタキ目	
24	M-13	表土	H 高坏		(2.1)			密	良好	淡赤褐色	内外面ナデ	
25	M-13	表土	H 壺		9.0	(2.3)		密	良好	淡赤褐色	内外面板ナデ	
26	M-13	表土	T 碗					密	良好	暗黒褐色	内外面回転ナデ、輪	
27	M-13	表土	T 碗					密	良好	淡黄褐色	内外面回転ナデ、刺突、輪	
28	M-13	表土	H 小皿	8.4	1.5			密	良好	淡黄褐色	内面ナデ、外面未調整、指押さえ	
29	M-13	表土	H 小皿	9.0	1.7			密	良好	淡赤褐色	内面ナデ、外面未調整、指押さえ	
30	M-13	表土	D 土鍾	長さ(4.0)、径3.5、重量7.1				密	良好	茶褐色	内面ナデ	

※法量の単位はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

J—縄文土器、S—須恵器、K—灰輪陶器、P—中世陶器、H—土師器、T—陶器、B—瓦製品、D—土製品。

4. 自然遺物

A. 資料の採取と方法 (第9図、第3・4表)

第4次調査で出土した自然遺物は、貝層のブロック・サンプリングによるものと発掘調査で得られた動物遺体2点である。このうちブロック・サンプリング資料の採取地点は、A1 (第11図)、A2 (第9図) に示し、サンプルサイズは第1表の通りである。サンプル中に含まれる内容物は第2表に示す。採取したサンプルの水洗選別に当たっては5mm、2.5mm、1mmのメッシュを使用し、浮遊したのもすくい分析の対象としている。

出土した動物遺体の主体は貝類であり、その他、魚骨、獣骨が確認されているが、量は少ない。なお、魚骨・獣骨は樋泉岳二氏 (日本学術振興会) に同定して頂いている。

第3表 ブロック・サンプル一覧表

番号	地区	層位	時期	サイズ (縦横厚)	体積 cm ³	重量 g
A 1	M-13	2層	江戸(19世紀以前)	30×30×5	4,500	4,852
A 2	M-13	SD-1	19世紀代	20×20×10	4,000	3,347

第4表 貝層サンプル内容物組成表

番号	総重量 g	水洗後残留物重量 (g)					土壌重量 g	混土率 (%)	貝殻 g	獣骨 g	魚骨 g	フジツボ g	微小貝 g	炭化物 g	石 g	種子 g	その他 g
		5mm	2.5mm	1mm	0.5mm	計											
A1	4,852	1,302	741	399	0.7	2,442.7	2,409.3	49.7	2,427.1	—	○	0.1	○	0.8	14.7	0.2	—
A2	3,347	1,382	411	202	0.5	1,995.1	1,351.5	40.4	1,920.5	1.4	—	○	0.3	0.5	72.8	○	—

○は0.1g以下を示す。

B. 貝類 (第5・6表)

貝類は腹足綱 (巻貝) 8種、斧足綱 (二枚貝) 6種で、合計14種である (微小貝を除く)。過去の調査で確認された貝類は腹足綱26種、斧足綱20種、合計46種であり、種数は少ない。また、新たに確認された貝類も見られない。

各サンプルの貝種組成をみると、19世紀代のA1はハマグリが96.2%と圧倒的に多く、マガキ2.9%と少ない。腹足綱は見られず、これはサンプル量の少なさも影響しているが、全体的に少ない状況にある。また、18世紀代の自然貝層にはアサリが18.8%と量的に多いことが確認されており、組成にアサリは見られないことはハマグリを選択的採取を示している。A2のSD-1資料では、ハマグリが59.3%とA1より少なく、キサゴ23.1%と台頭している。しかし、腹足綱の33.7%を除けば、アサリの3.2%が次ぐ状況と言うように、ハマグリへの集中は変わらない。

これら採取された貝類は、全て内湾水域の砂質～砂泥質底のもので、ハマグリ主体ということ以外現在の三河湾 (六条湾) と貝種が同様であり、当然前方に広がる三河湾で採取したものと考えられる。三河湾には様々な貝種 (約300種) が見られ、六条湾でも数十種は簡単に確認できる。しかし、A1・2からは、キサゴを除けばハマグリ以外のアサリ等他種は排除されており、ハマグリが選択的に採取されていた。これは江戸時代の蛤運上、つまりハマグリ漁業権のために年貢を支払っていることの影響が大きい。一方、キサゴの多さは、当時農業肥料として大量に採取されていたことが記録に残っており、食料ではなく肥料目的の要素が大きい。

第5表 動物遺体種名一覧表 (微小貝を除く)

I. 軟体動物門 MOLLUSCA

腹足綱 GASTROPODA

- | | |
|-------------------|---|
| 1. ニシキウズ科キサゴ | <i>Umbonium (Suchium) costatum</i> (KIENER) |
| 2. ニシキウズ科イボキサゴ | <i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> (LAMARCK) |
| 3. リュウテン科スガイ | <i>Lanella coronata coreensis</i> (RÉCLUZ) |
| 4. ウミナナ科イボウミニナ | <i>Bailliarina zonalis</i> (BREGUIÈRE) |
| 5. ウミナナ科カワアイ | <i>Cerithidea (Cerithiopsis) djadjariensis</i> (K.MARTIN) |
| 6. タマガイ科ツメタガイ | <i>Neverita (Glossaulax) didyma</i> (RÖDING) |
| 7. タマガイ科ネコガイ | <i>Eunaticina papilla</i> (GMELIN) |
| 8. オリレイヨウバイ科アラムシロ | <i>Tritia (Hinia) festiva</i> (POWYS) |

斧足綱 PELECYPODA

- | | |
|-----------------|---|
| 1. イガイ科クログチ | <i>Adula atrata</i> (LÄSCHKEN) |
| 2. イタボガキ科マガキ | <i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG) |
| 3. マルスダレガイ科ハマグリ | <i>Meretrix lusoria</i> [RÖDING] |
| 4. マルスダレガイ科アサリ | <i>Tapes (Amygdala) japonica</i> (DESHAYES) |
| 5. バカガイ科シオフキ | <i>Macra veneriformis</i> (REVEE) |
| 6. マテガイ科マテガイ | <i>Solen strictus</i> (GOULD) |

II. 節足動物門 ARTHROPODA

蔓足亜綱 CIRRIPEIDIA

- | | |
|----------|----------------------|
| 1. フジツボ類 | <i>Balanidae</i> sp. |
|----------|----------------------|

III. 脊椎動物門 VERTEBATA

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

- | | |
|---------------|------------------------------------|
| 1. タイ科?、属・種不明 | <i>Sparidae</i> gen. et sp. indet. |
|---------------|------------------------------------|

哺乳綱 MAMMALIA

- | | |
|----------|--------------------------------|
| 1. ウマ科ウマ | <i>Equus caballus</i> LINNAEUS |
|----------|--------------------------------|

第6表 貝種組成表

種名 ブロック チップとNo	腹 足 綱										斧 足 綱								計				
	キサゴ	イボキサゴ	スガイ	イボウミニナ	カワアイ	ツメタガイ	ネコガイ	アラムシロ	小計	クログチ	マガキ		ハマグリ		アサリ		シオフキ			マテガイ		小計	
											L	R	L	R	L	R	L	R		L	R		
A1	L/R										3/1	88/101					1/0				105	105	
最小個体数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	101			0	0	1	1			105	105	
%	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2.9	96.2			0	0	1.0				100.1	100.1	
A2	L/R										1/1	6/3	115/131	3/7	2/0							147	221
最小個体数	51	11	1	5	1	2	1	2	74	1	6	131	7	0	0	0					147	221	
%	23.1	5.0	0.5	2.3	0.5	0.9	0.5	0.9	33.7	0.5	2.7	59.3	3.2	0.9	0							66.6	100.3

C. 微小貝 (第7・8表)

確認できた微小貝は、鹹水産4種、陸産5種の計9種(第7表)で、汽水産は見られない。A1では全く微小貝が見られず、これは周辺貝塚の様相と比較しても非常に珍しい。A2は鹹水産が46.7%を占め、陸産との比率はほぼ半数であった。陸産の微小貝ではヒメベッコウ、ウラジロベッコウマイマイやヒメコハクガイ等、木の根付近や落葉下の湿気の高い環境を好むものが多いのが特徴であり、SD-1が埋没するのに時間がかかったことが考えられる。鹹水産のうちタマキビガイは現在の三河湾でもマガキに付着する例が多々見られ、マガキに付着したものがこの地に運ばれたものと思われる。その他、シマハマツボ等の海草に付着するものが若干認められている。

第7表 微小貝種名一覧表

A. 鹹水産

1. タマキビガイ科タマキビガイ
2. タマキビガイ科マズズラタマキビガイ
3. カワザンショウガイ科ヘソカダガイ
4. オニフソガイ科シマハマツボ

Littorina brevicula (PHILIPP)
Littorina strigata (LASCHE)
Paludinella japonica (PILSBRY)
Diffalaba picta (A.ADAMS)

B. 陸産

1. オカチョウジガイ科オカチョウジガイ
2. コハクガイ科ヒメコハクガイ
3. ベッコウマイマイ科ウラジロベッコウマイマイ
4. ベッコウマイマイ科ヒメベッコウマイマイ
5. オナジマイマイ科マイマイ属の一種

Allopeas kyotensis PILSBRY et HIRASE
Hawaia minuscula BINNEY
Pseudhelicarion doenitzii (REINHARDT)
Discoconulus sinapidium REINHARDT
Euhadra sp.

第8表 微小貝種組成表

種名 ブロック 番号 (%)	鹹 水 産					陸 産					不 明	計	
	タ マ キ ビ	マ ル ウ ズ ラ	ヘ ソ カ ダ ガ イ	シ マ ハ マ ツ ボ	小 計	オ カ チ ョ ウ ジ ガ イ	ヒ メ コ ハ ク ガ イ	ウ ラ ジ ロ コ ウ	ヒ メ ベ ッコ ウ	マ イ マ イ 属			小 計
A1 最小個体数 %	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
A2 最小個体数 %	5 16.7	3 10.0	5 16.7	1 3.3	14 46.7	2 6.7	4 13.3	3 10.0	5 17.0	1 3.3	15 50.3	1 3.3	30 100.3

D. 魚類 (第9表)

魚骨は少なく、4点のみであった。全て江戸時代の貝層中から出土している。このうち、2層からタイ科と思われる歯が1点出土している。後のものは細片のため部位等不明である。

第9表 魚骨數量表

地 区	層 位	フツ %No	メツク	時 代	種 名	部 位	数	備 考
M-13-18	2層	A 1	1 mm	江戸	タイ科?	歯	1	
M-13-18	2層	A 1	1 mm	江戸	硬骨魚類?	部位不明破片	3	

E. 哺乳類 (第10表)

哺乳類も少なく、4点のみであった。このうち2層からウシまたはウマと思われる四肢骨の破片が1点、SD-1からウマの上顎第2切歯が1点出土しているのみであった。

第10表 獣骨數量表

地 区	層 位・遺構	時 代	種 名	部 位	L/R	備 考
M-13-13	2層	江戸	哺乳類	四肢骨破片		ウシまたはウマ
M-13-14	SD-1	江戸	哺乳類	部位不明破片		A 2、5mmメツク採取
M-13	SD-1	江戸	ウマ	上顎第2切歯	R	
M-13	攪乱	不明	哺乳類	部位不明破片		

参考文献

- 豊橋市教育委員会他 1995 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第19集 大西貝塚」
 豊橋市教育委員会他 1996 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第29集 大西貝塚(Ⅱ)」

第5章 まとめ

大西貝塚は、今までの調査によって縄文時代後期後葉～江戸時代の貝塚であり、全体の規模は長さ約235m、幅約105m、面積約19,000㎡、厚さは最大約3mと西日本で最大級であることが判明している。このうち、縄文時代の貝層も長さ185m、幅40mを測り、平面形はくの字形で、面積5,762㎡、体積は5,877㎡と東海地方では最大の大きさである。

今回行った第4次調査区は16㎡と狭く、しかも大半を現代の攪乱（ゴミ穴）で壊されていた。だが、破壊部以外の保存状態は比較的良好であった。縄文時代の貝層は検出されなかったが、第1～3次で確認されている貝塚基盤の黒色砂質土層が今回の調査区まで広がるのが新たに確認された。この層は貝塚より若干大きく分布しており、豊川左岸では貝塚部のみしか存在していない層である。過去の分析で人為的な燃焼行為が指摘されており、おそらく貝塚形成時、つまり海浜部での作業する際、作業場を確保するために野焼きが行われたことによるものと考えられる。

貝塚を形成している貝類は、第1～3次調査ではハマグリ主体で最大97%を占め、縄文～江戸時代（19世紀）まで殆ど同じであった。これら貝層を形成している貝種は腹足綱（巻貝）26種、斧足綱（二枚貝）20種の計46種（微小貝を除く）が確認できている。今回は江戸時代の貝層で、合計14種と少なかったが主要な貝類は含まれていた。特筆されるのは、江戸時代のサンプルA1において、ハマグリが96.2%を占めたことである。採貝活動の行われた干潟（六条潟）は、18世紀後半では豊川河口部に行われた新田開発の影響で、アサリが18.8%まで増えていることが確認（注1）されている。また、この時代は船運上という制度があり、ハマグリは漁業権が年貢として吉田藩に納められ、牟呂村だけでも17石の運上高であった（注2）。このためハマグリが特別扱いされており、アサリを排除してハマグリを選択採取していたようで、ハマグリは佃煮等の加工が行われていたのだろう。こうした理由から、干潟の様相が新田開発以降変化しても、縄文時代～江戸時代の貝塚における貝種組成は変化していない場合が多い。

一方、微小貝は鹹水産4種、陸産5種の計9種が確認されたが、汽水産は確認されていない。マガキに付着しているタマキビガイも多く見られ、採取された貝類に付着して運ばれたものと、高湿度の環境を好む陸産のものが見られた。だがA1サンプルからは、1個体の微小貝も確認されていない。このことは、大西貝塚の他の貝層と比較しても特異であり、理解し難いものである。

遺構では土壇9基、溝2条が検出されている。このうち土壇は縄文時代のもと考えられるが、全て小規模なもので柱穴等ではない。一方溝は近世のものであった。今回の調査では、敷石炉や石組炉、地床炉は見つからなかったが、今までに総計で敷石炉5箇所、石組炉2箇所、地床炉109箇所が確認されている。

出土遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、陶器があるが、いずれも少量である。このうち縄文土器は、晩期後葉の五貫森式を中心とした突帯文土器で、後期後葉のものや晩期中葉と思われるものも若干存在している。

石器・骨角器・貝製品は1点も出土せず、過去に石鏃2点、打製石斧7点、磨製石斧13点、ヤス4

点等と狩猟・漁労用具の出土数は極めて少ない。

獣骨は江戸時代のウマが確認されたのみで、魚骨は江戸時代の貝層からタイ科と思われる歯が僅かに出土したのみである。食料となった動物遺体の出土数は今まででも少ない。

以上、第4次調査の成果をまとめ、第3次調査までの成果を併せて記載した。今回は縄文貝層は見つかっていないが、縄文時代の大西貝塚は、近年東京都中里貝塚のように関東地方で確認されているハマ貝塚の典型例といえ、干し貝加工の専門場であった。だが、貝塚を残した集団の居住域が未だに見つかっていない。今回調査した段丘上は海に突き出た好立地の地形であるが、発掘、試掘や立会い調査でも住居址はおろか遺物が集中するところは確認されていない。この段丘縁部の限られた範囲には性格不明な小規模の土壌群が確認されている。しかしこれだけの貝塚を残した集団であるため、集落址と考えた場合石器・骨角器などの日常生活に伴う遺物が多量に出土してもおかしくはないはずであるが、実際は皆無に等しい。これらのことから貝塚背後の段丘上には集落は存在しなかったと考える。では、どこに居住域があったのか。貝塚周辺で可能性がある地点は貝塚の立地する砂堆、つまり砂浜海岸である。縄文晩期後葉は今よりも海水位が低く、当時は幅100m前後、標高約1mの砂浜海岸が段丘西側に広がっていたことが推定される。貝塚周辺の砂浜海岸は調査が進んでおらず、不明な地帯である。しかし、貝塚があり同様な環境にある水神地区においては、砂浜海岸部では試掘・本調査でも確実な住居址は検出されておらず、集落址が存在している可能性は低い。このことから貝塚を残した集団の居住域は、貝塚周辺部ではなく離れた場所に所在していたものと思われる。

その後、周辺に集落が確認されるのは古墳時代後期(註3)になってからであり、これ以後の貝塚は、集落に伴う貝捨て場であった。中世までの貝殻の廃棄状態は溝や土壌等の窪地に捨てるのが多かったが、江戸になって多量にハマグリが採取されるようになると、旧海浜部の平坦地に堤防状に投棄し、大西第3次調査で確認された江戸期の貝層や近くのさんまい貝塚のように縄文時代の貝塚と全く変わらない巨大な貝塚を堤防状に形成させている。明治まで殻山が堤防状に連なっていたと記録(註4)があるのは、水神貝塚(第2貝塚)のように縄文時代のももあるだろうが、大半は江戸時代のものと推測される。第3次調査や今回確認された江戸貝層のように、江戸時代の貝塚は立地、堆積状況、貝種組成等、縄文時代のものと全く変化がないのが特徴である。ただ、近隣の大崎村では浅蛸串刺しが名産品として記録にあるのに対し、これら多量に採取されたハマグリがどのように用いられたのかは記録に残っていない。しかし、江戸という時代を考慮すれば、これらのハマグリは佃煮等の商品として加工されたことが充分考えられ、これら多量に捨てられた貝殻は生産のための残留物、つまり産業廃棄物であろう。今風に言えば江戸期貝塚は当時の産業廃棄物処理場であったと言える。

註1 岩瀬彰利 1996 「付載3. 貝塚周辺の自然貝層について」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第29集 大西貝塚(Ⅱ)』豊橋市教育委員会

註2 豊橋市 1975 『豊橋市史』第2巻

註3 豊橋市教育委員会他 1996 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第34集 大西遺跡」

註4 白井梅里 1993 「古代概観 その一」『牟呂吉田村誌』

報告書抄録

ふりがな		おおにしかいづか(3)						
書名		大西貝塚(Ⅲ)						
副書名								
巻次								
シリーズ名		豊橋市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		第39集						
編著者名		岩瀬彰利						
編集機関		豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会						
所在地		〒440 愛知県豊橋市今橋町1番地 TEL 0532-51-2879						
発行年		西暦1997年10月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおにしかいづか 大西貝塚	とよはしむちちよう 豊橋市半呂町 あぞおおにし 字大西124番地他	23201	79446	34°	137°	19960201～ 19960217	24㎡	公園施設
				44′	21′	19970728～ 19970804	16㎡	築造工事
				57″	21″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大西貝塚	貝塚	縄文 古墳・古代 近世	土城、 貝層、掘立柱建物、 溝	縄文土器、 須恵器、土師器 陶器、土師器(皿・鍋)、 鎌	235×105m (全体) 185×40m (縄文) の大規模な貝塚			

写 真 图 版



1. 平成7年度試掘・G-1全景 (南から)



2. 平成7年度試掘・G-2全景 (南から)



3. 平成7年度試掘・G-3全景 (南から)



4. 平成7年度試掘・G-4全景 (南から)



5. 平成7年度試掘・G-5全景 (南から)



6. 平成7年度試掘・G-6全景 (南から)



1. 本調査区全景 (東から)



2. 本調査区内具層露出状況 (東から)



1. 1層分布状況 (東から)



2. 2層分布状況 (東から)



1. 本調査区東壁 (西から)



2. 本調査区西壁 (東から)



3. 本調査区北壁 (南から)



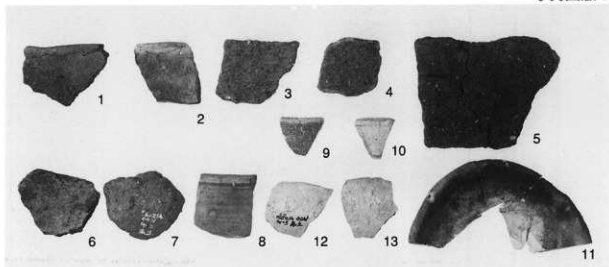
4. 本調査区南壁 (北から)



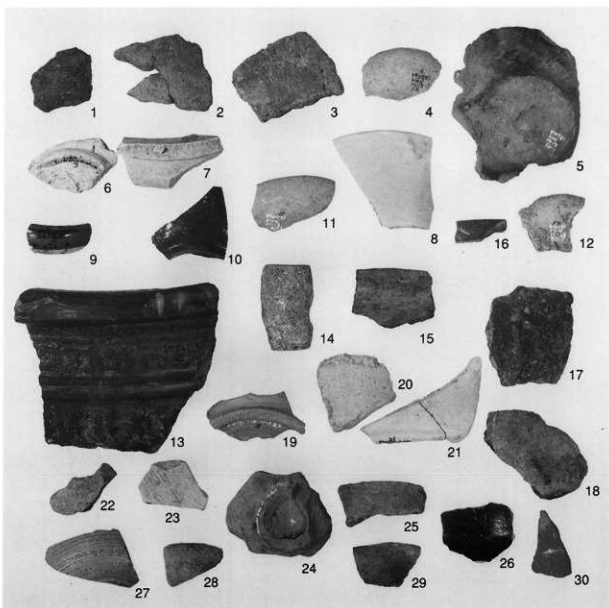
1. SD-1 全景 (西から)



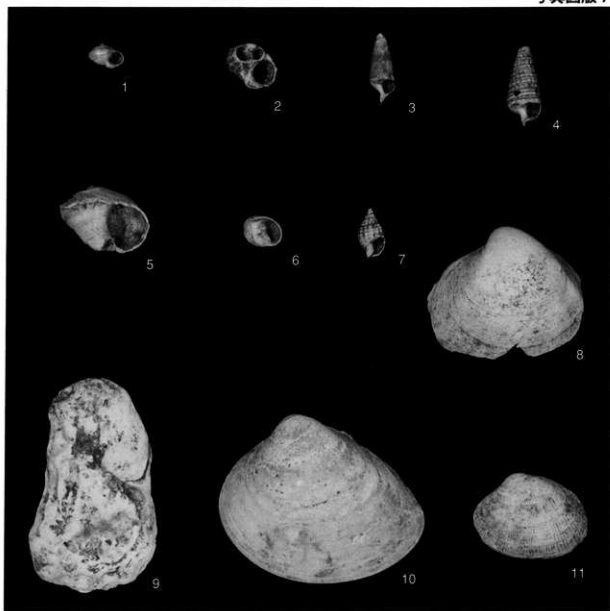
2. 調査風景



1. 試掘・立会い調査出土遺物

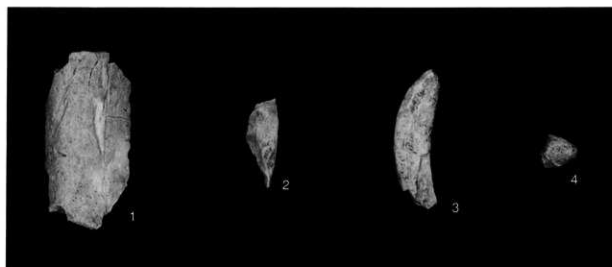


2. 本調査出土遺物



1. 動物遺体-1・貝類

1.キサゴ、2.スガイ、3.イボウミナ、4.カワアイ、5.フメタガイ、6.ネコガイ、7.アラムシロ、8.シオフキ、9.マガキ、10.ハマグリ、11.アサリ



2. 動物遺体-2・獣骨

1.ウシまたはウマ、2.哺乳類、3.ウマ、4.哺乳類

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第39集

大西貝塚(Ⅱ)

平成9年10月31日

発行 豊橋市教育委員会◎

文化振興課

豊橋遺跡調査会

〒440 豊橋市今橋町1番地

印刷 ㈱豊橋印刷社